



お取引様各位

2025 年 7 月 31 日
ユアサ木材株式会社

平素は大変お世話になり、ありがとうございます。
各地駐在員、エージェンツから入りました地域別産地情報を連絡させていただきます。

No. 269

マレーシア

AA) トピックス

●米国関税と木材製品の調達動向

トランプ大統領の関税発表以降、米国市場では木材製品の調達先が変動している。

特にインドネシアとマレーシアからの供給に注目が集まる。

インドネシア産合板には 19%の関税が課税確定だが、マレーシア産には 25%の関税率が提示され、その最終決定は 2025 年 10 月 1 日まで延期された。変更の可能性は残る。

米国バイヤーの意思決定に最も影響を与えているのが、中国、インドネシア、ベトナムの広葉樹・装飾合板に対するアンチダンピング(AD)および相殺関税(CVD)調査だ。

申し立ては、これら諸国が不当な政府補助金を受け、または公正な価格より低い価格で米国に合板を販売しているというものとなる。

特にインドネシアに対しては最大 202.8%という非常に高いダンピングマージンが指摘されており、もしダンピングが認定されれば、現在の 19%をはるかに超える関税が課される可能性がある。

さらに、2025 年 6 月 11 日以降に輸入された貨物についても、不公正な貿易慣行が認定されれば遡及的に関税が課される恐れがある。

米国バイヤーがマレーシアのサバ州を優先する背景には、リスク軽減の意図がある。

マレーシアの関税が 25%に確定しても、インドネシアに対するダンピング調査の結果、200%を超えるような関税が課されるリスクを考慮すると、マレーシアからの調達の方が価格の不確実性が低く、安全だと判断されている。

マレーシアはダンピング調査の対象となっていないため、予期せぬ関税賦課のリスクが低いというメリットがある。

2025 年 10 月 1 日前の出荷ラッシュは、こうした状況を反映したものだ。

木材製品に限らず、ゴムやパーム油など、米国へ輸出する多くの工場がこの期限までに急いで出荷を進めている。

Evergreen のコンテナが米国向けで完全に予約されていることから、様々な産業で関税変更を見越した出荷の加速が広範に起きていることがわかる。

米国バイヤーは、既存の関税に加え、進行中のダンピング調査による潜在的な影響も考慮して

調達戦略を立てている。

マレーシアの関税がインドネシアよりも高い可能性があっても、インドネシア産合板に課されるかもしれない懲罰的なアンチダンピング関税のリスクを回避するため、マレーシアがより魅力的な長期的な調達先と見なされている。

●タイ・カンボジア紛争におけるマレーシアの功績

タイとカンボジアの間で再燃した国境紛争において、マレーシアは重要な仲介役を担い、事態の沈静化に大きく貢献した。

この紛争は 2008 年以降で最悪の死者数を記録し、両国で 30 人以上が死亡、約 30 万人（国連発表値に基づく）が避難を強いられる深刻な人道危機を引き起こしていた。

国際社会、特に米国も事態の沈静化を強く求めていた。

このような緊迫した状況下で、マレーシアは自国の外交力を駆使し、紛争解決への道を開いた。マレーシアはタイとカンボジア双方から、この国境紛争における仲介役として全面的な信頼を獲得し、両国首脳はマレーシアによる協議の円滑化を要請。

マレーシアのモハマド・ハサン外相は、他国が仲介に参加することはないと述べ、マレーシアが単独で仲介を行うことへの自信を示した。

マレーシアの働きかけにより、2025 年 7 月 28 日夜には、マレーシアのクアラルンプールでタイのプームタム副首相兼内相（首相代行）とカンボジアのフン・マネット首相による会談が実現した。

この会談は紛争の沈静化に向けた重要な一歩となった。

マレーシアが仲介したこの首脳会談において、両国は 29 日午前 0 時からの即時かつ無条件の停戦に合意。

これにより、5 日間にわたる軍事衝突に終止符が打たれ、緊張緩和に向けた具体的な成果が得られた。

また、マレーシアのアンワル・イブラヒム首相は、ASEAN 地域フォーラムの開催中にも敵対行為の停止を提案するなど、継続的な外交努力を重ねていた。

タイとカンボジアの国境紛争の解決において、マレーシアの積極的な仲介は地域の安定に不可欠な役割を果たした。

両国首脳がマレーシアの仲介に全面的な信頼を寄せ、実際に停戦合意に至ったことは、マレーシアの外交手腕と地域における信頼性の高さを証明している。

BB) 木材状況：

マレーシアの 7 月は乾期が続き、原木の伐採・輸送に支障はないものの、国内価格がコストを下回るため伐採意欲が低く、流通在庫が少ない状況だ。

乾期中の原木確保が進まず、今年も雨期に不足が予想される。

サラワク州からの 5 月原木輸出量は減少した。

合板業界では、7 月も各シッパーが値上げをアナウンス。

7 月 1 日からの売上・サービス税 (SST) 導入、10 月からの外国人労働者への公的年金制度 (EPF) 適用（雇用者負担 2%）により、製造コストが増加し、値上げ継続が不可避となっている。

6 月の日本向け合板輸出量も減少した。

一般情勢では、5 月の消費者物価指数 (CPI) は前年同月比**1.8%**（要確認）上昇と低水準。

マレーシア中央銀行は 7 月 9 日、景気減速への予防的措置として政策金利を 0.25%引き下げ 2.75%とした。

インドネシア

バンジャルマシン地区の合板工場の原木入荷事情は改善しつつあるが、不足感はまだ続いており原木価格は一段と値上がりする傾向にある。また乾季はおおむね 4 月～10 月だが、ピークは 7 月 8 月でこれから乾季の影響が出てくるので、早めの発注をおすすめしたい。

さて世界を揺るがしているトランプ関税だが、インドネシアにも大きな影響を及ぼしている。7 月 16 日にプラボウォ大統領はトランプ大統領との直接協議を経て両国が合意に達したと発表されたが、その内容はインドネシアにとっては不利なものといえる。インドネシアから米国への輸出品には一律 19%の関税を課す一方で、米国からインドネシアへの輸入品には無税、また、合意の条件としてインドネシア側が今後、米国産エネルギーを 150 億ドル、農産品を 45 億ドル相当購入することとなった。さらには米国ボーイング社製旅客機を 50 機調達することになった。渋々ながらの合意というゆえんである。

インドネシアの多くの国民は、米国の圧力に屈したことに不満を抱きつつも、米国に逆らえない諦めのムードとなっている。この合意でインドネシア国民感情は米国から離れる事も考えられる。ここぞとばかりにロシアや中国がインドネシアへの接近を図っているともいわれている。インドネシアは 2025 年 1 月に BRICS に正式に加盟しており、すでに米国トランプ政権とは一定の距離をおく傾向にある。その事例として、6 月にプラボウォ大統領はカナダ G7 サミットに招待され一時は招待を受け入れたが、直前になってカナダ行きをキャンセルして、ロシアへ行きプーチン大統領が主催する国際経済フォーラムに出席した。この出来事は国際社会が G7 よりも BRICS を重視する傾向にあるともいえるが、そう短絡的に考えていいのかとも思う。

まず、トランプ関税について。インドネシアの輸出総額に占める対米輸出の割合は 10%で、対中国輸出（24%）や ASEAN 域内輸出（20%）に比べると特段大きいわけではない。そもそも、インドネシアは内需主導型の経済で、輸出額の対 GDP（国内総生産）比は 2 割ほどと、近隣の輸出主導経済の国と比べるとかなり低い。見返り輸入条件にこそ焦点をあてるべきだろう。

次に、G7 への出席を蹴って、ロシアで開かれた国際経済フォーラムに参加したことについて、この点が外交筋やメディアで取り上げられることを意識して、プラボウォ大統領は国際経済フォーラムでの演説でわざわざ次のように言い訳をしている。「私は G7 を尊重していないわけではない。以前からフォーラムに招待されており、その約束を果たしただけだ」。もちろんこれは建前だろうが、決して G7 を見限ったわけではないとわざわざ言及しているところに、プラボウォなりの配慮がみられる。インドネシアにとって G7 の有用性が低下しているのは確かである。トランプ大統領の登場で、G7 の結束力と影響力が低下しているのはサミット開催前から明らかであった。実際に、トランプ大統領は 1 日目でサミットを去り、首脳宣言もまとめることはできなかった。ブラジル、インド、メキシコ、南アフリカなどグローバルサウス諸国の首脳も招待されて出席したが、トランプ大統領と関税交渉をするという各国の目論見は外れた。さらには、世界最大のムスリム人口を抱え、常にパレスチナを支持してきたインドネシアの立場からすれば、戦争が激化しているこの時期に、中東情勢をめぐってイスラエル寄りの立場をとる G7 サミットに出席することは内外に示しがつかないということもある。実際に、G7 サミットに招待されたサウジアラビア、アラブ首

長国連邦（UAE）といった中東諸国も参加を見送っている。ゆえに、今回のプラボウオの行動は合理的だったといえる。

インドネシアとロシアは、旧ソ連時代から数えると、2025 年に国交樹立 75 周年の記念の年を迎えている。ソ連がインドネシアの対オランダ独立闘争を支持してくれたことや、初代スカルノ大統領が容共的姿勢をとった歴史的事実もある。常にバランス外交を考えるインドネシアの狡猾さと賢明さというふうに考えているが、今後は果たしてどうなるか。

中国

これまで中国は「森林の量的拡大」に重点を置いてきたが、2025 年からは明確に「質の向上」へと舵を切った。天然林と人工林のバランスを見直し、単一樹種から複数の樹種が共存する混交林へと転換を進めるほか、植林後の継続的かつ科学的な管理体制の強化が重要課題とされている。

毎年 3 月 12 日の植樹節には習近平国家主席も参加し、「拡緑・興緑・護緑」という“三緑”戦略を掲げている。単なる緑の量ではなく、その質こそが国家の基盤を底上げする鍵になるという認識が、今の中国政府のスタンスにある。さらに 2025 年以降、中国は新たな樹種の開発と導入を森林政策に取り入れ始めた。気候変動や病害虫に対する耐性が高く、炭素吸収能力にも優れた品種の育成・普及を通じて、森林の生態的な安定性と多機能性の向上を目指す。将来的には、桐やニレといった新たな樹種を中心に据え、地域特性を活かした林業産業群を形成する構想も見えてきた。これにより森林資源の持続可能性と経済価値の両立を図る方向へ政策が進化しつつある。

こうした背景から、今後中国から輸出される木材の樹種構成にも変化が生じる可能性が高い。早期に候補となる樹種を見定め、実用化に向けたトライアルに着手しておく必要があると考えている。

7 月に入ると、家のタンスから浴衣が出された。子どもたちは夏休みに入り、花火大会や祭りの話で盛り上がっている。そうか、毎日の忙しさに追われていたけれど、世間はもう夏休みなのだ。

かつて「火薬の国」と呼ばれた中国では、夏になると各地で盛大な花火大会が開催され、夜空を照らす光の芸術が人々を魅了してきた。だがこの数年、その伝統に新たな風が吹いている。LED を搭載した数百～数千機のドローンが、空に鮮やかな図形や文字を描き出す“ドローンライトショー”が、都市の広場や川沿いで人気を博しているのだ。これは単なるテクノロジーの応用ではなく、伝統と革新が交差する新たな芸術文化の誕生を意味している。

重慶市では 1 万機以上のドローンが空を覆い、流れるような竜や歴史的モチーフを立体的に表現。南寧では 2000 機以上が夏祭りと同様開催され、環境に配慮した新しい演出として注目された。従来の花火が持つ迫力と郷愁、そしてドローンショーが持つ精密性と静けさ。これらが融合することで、視覚と感情に訴える「次世代型夜空ショー」が中国全土で急速に広まりつつある。

この流れは、日本にも静かに波及している。近年、日本では従来の夏の花火大会が、気候変動や観光イン

フラ、警備体制の関係から“前倒し開催”や“秋・冬への分散開催”に移行し始めている。これにより、花火師たちは特定の時期に集中していた仕事が年間を通して分散され、経済的にも精神的にも余裕を持てるようになってきた、と報道されていた。そして今、花火とドローンの「競演」が次の大きな可能性として注目されている。夏の夜空では、煙や風向きの影響でドローンの光が見えにくくなるという技術的課題があったが、秋や冬の澄んだ空気と安定した気象条件を活かせば、その演出力はさらに高まる。すでいくつかの自治体では、ドローンによる演出とのコラボレーションを検討しており、煙の中に浮かぶ光の造形は幻想的で、観客の心に深く刻まれる体験となるはずだ。

ドローンが空に描くのは、単なる技術ではなく“物語”である。たとえば地域の伝承、季節の移ろい、あるいは未来への願い。そうした思いを文字や形に変えて夜空に投影することで、祭りそのものが「共有される記憶」として生まれ変わる。そこに花火が持つ“爆発する感情”が加われれば、静と動、光と影のドラマが観客を包み込むようになる。私たちが今、注目すべきは「ただの見世物」ではなく、「文化の変容」である。ドローンと花火が織りなす演出は、老若男女が一緒になって楽しめる包容力のある空間を作り出し、人と人、人と地域を結びつける場となりうる。コロナ禍を経て、人が集まり、感動を共有する意味が見直される中、このような“未来の祭典”が果たす役割は、決して小さくないだろう。

日本には、四季がある。春の桜、夏の祭り、秋の紅葉、冬の澄んだ空気。そこに、ドローンと花火のコラボレーションによる新たな１ページを加えることで、単なる伝統行事から“進化する文化イベント”として定着する可能性は大いにある。とりわけ地方都市においては、人口減少や観光再生の文脈において、このような空間演出は地域のブランディングに直結する。日本が織りなすきめ細やかな祭典は、日本人のみならず外国人観光客にも確実に注目されていくだろう。

未来の夜空は、ただの真っ暗では終わらない。テクノロジーと芸術、伝統と革新が溶け合ったその空には、世代を超えて人々を惹きつける“物語”が宿る。日本各地でも、こうした新しい祭典が生まれ、根付き、そして進化していくことを、私は心から期待したい。そして、新たに生み出される祭典の創造に、我々はいち早く着手していきたい。

ベトナム

7月21日から22日にかけて、ベトナム北部に大型台風が上陸し、強風と大雨をもたらした。ベトナム北部に上陸する前には、台風の勢力はやや弱まっていたようだが、それでもハロン湾の観光船転覆死亡事故が発生するなど、大きな被害が発生した。2024年に被害をもたらした超大型台風（ヤギ）ほどの被害は出ていないようだが、これは、政府からの事前緊急対応が功を奏したと報道されている。

産地の状況は、前回の台風ほど大きな被害は起きていないと伝えられている。山林地区は“要所要所”で土砂崩れが発生しているので、一部原料の出材に難を来す事は想定されるが、予め手を打っておくまでには至らないだろうと思われる。単板価格がしばらく高値で取引されている状況下、このような天候要因はさらなる単板価格の上昇に繋がる。製品価格への転嫁はいよいよ時間の問題となりそうである。

都市の喧騒が始まる前、ベトナムの早朝には静かな音楽が流れる。それは、人の声でも車のエンジンでもない。小さな体から発せられる、透き通るような鳥のさえずりだ。カフェの軒先にずらりと並んだ鳥カゴ。中にはチッチッと小気味よく鳴く「チーチョー：日本名シキチョウ」や、威風堂々とした姿で優雅な旋律を響かせる「ホアミー（≡ウグイス、ホオジロ）」。

ここはただの喫茶店ではない。人と鳥とが共鳴する、ベトナム独特の社交空間なのだ。

この習慣のルーツは、王朝時代にまで遡る。かつての文人や知識階級にとって、鳥の声とは、ただの娯楽ではなく「精神修養」の一環だった。15世紀以降の宮廷では、庭園に鳥を放ち、その鳴き声を詩や音楽の着想源とした。清らかな鳴き声は心を鎮め、複雑な思いに潤いをもたらすそんな捉え方がなされていたのである。

時代を経て、フランス統治下の20世紀初頭になると、ヨーロッパのカフェ文化がハノイやサイゴン（現ホーチミン市）で浸透した。これがベトナムの都市生活と融合し、現在の「鳥カフェ」文化が形成された。つまり、カフェという欧風の社交場に、鳥という東洋的な精神文化が融合し、「カフェ・チム（鳥カフェ）」という独特な空間が生まれたのである。

そして現代、特に都市部ではこの文化が再評価されている。経済発展とともに生活が忙しさを増すなか、鳥の鳴き声は人々に静寂と癒しをもたらす。朝6時、まだ街が眠る時間帯に、カフェのテラスにはすでに10人以上の鳥愛好家が集まり、鳥の健康状態を話したり、鳴き声の質を比べたりしている。

ある年配の男性はこう語る。“鳥の声を聞くと、昔の田舎の風景が思い出されて、自然と心が落ち着く。これは薬にも勝る”。また、若い世代にもファンは増えている。スマートフォンで録音した自慢の鳥の鳴き声をSNSに投稿する若者も多いと、ある大学生は言う。“毎朝5時に起きて、鳥と一緒にコーヒーを飲むんです。友達には変わってるって言われるけど、この時間が一番自分らしくいられる”。

では、ベトナムで人気の鳥とはどんな種類だろうか。まず筆頭に挙げられるのが「ホアミー（≡ウグイス、ホオジロ」、正式な日本名でいうと画眉鳥というらしい（ちょっと詳しくないので調べました）。その力強くも繊細な鳴き声は、他の鳥に比べて明らかに格が違う。次いで「チーチョー（シキチョウ）」は、その小さな体からは想像できないほどのクリアな音色が特徴で、初心者にも人気が高い。他にも「チャオマオ（ヒヨドリ）」や「ソンカ（ヒバリ）」など、鳴き声の美しさ、姿の優雅さ、さらには人懐っこさなどを基準にして好まれる傾向にある。

鳥カゴにもこだわりが見られる。籐や竹を用いた手作りの鳥カゴには、装飾的な細工が施され、まるで小さな宮殿のようだ。装飾された布に包まれた鳥カゴを開ける瞬間は、鳥愛好家たちの目が集まる瞬間でもある。愛好家の間では、どの鳥にどんなカゴを合わせるかも一種の美学であり、「鳥と人との生活空間」をいかに調和させるかが重視されるようだ。

この文化の面白さは、「鳥を飼う」ことが単なるペットとしての関係ではなく、「朝を共にする仲間」としての存在になっている点にある。鳥を通して自然と触れ合い、他人とつながり、自分自身を見つめる。そんな時間を確保することで、都市生活における「余白」が生まれているのだ。

観光客にとっては、これほど地元の生活に溶け込んだ文化体験は珍しいかもしれない。ベトナムを訪れた際には、ぜひ早朝のカフェに足を運び、鳥のさえずりに耳を澄ませてみてほしい。コーヒーの香りとともに、鳥の声がゆっくりと心をほぐしてくれるはずだ。

ロシア関係

AA) トピックス (「“カチューシャ” に想いを馳せる」) :

近所の寺院の墓地に松井須磨子の墓がある。大正の初め、戯作や小説を創作した日本の新劇運動の先駆けのひとりとして知られた島村抱月は、松井須磨子との恋愛スキャンダルにより、当時属していた文芸協会をともに除名され、“芸術座”を旗揚げした。文芸協会時代からシェイクスピアの“ハムレット”のオフィーリア役やイプセンの“人形の家”のノラ役を演じ、その才能と演技力で注目を浴びた須磨子は、明治から大正時代にかけて新劇俳優として一世を風靡した。歌唱力の評価も高く、今でいえばミュージカル俳優の草分けといえるだろう。歌舞伎が主流だった時代に、西洋演劇を採り入れた新劇の発展に大きく貢献した。彼女の登場は、女性が舞台上で活躍する“女優”という新たな職業の道を切り開き、当時の大衆に大きな影響を与えたとされる。このように、彼女は日本の近代演劇史において重要な足跡を残した。だが、公私にわたるパートナーだった抱月がスペイン風邪により急逝する。この突然の死は須磨子に大きな衝撃を与え、彼の死からわずか2カ月後、彼女は後を追うように自ら命を絶つ。享年34歳（最近、享年に歳をつける表記も一般的になっている。国語辞書でもそう記載されている）。年譜をみると享年33と思うが、戸籍上の関係もあり34が定説になっているようだ。



新宿区弁天町の多磨霊園にて

芸術座での活動でも、松井須磨子人気はとどまることはなかった。それには大正3年に上演されたトルストイ原作“復活”で演じたカチューシャ役が果たした影響が大きい。劇中歌の“カチューシャの唄”が大ヒットし、全国的なブームを巻き起こす。これは、日本で最初にヒットした流行歌（歌謡曲）とされている。そして須磨子は“歌う女優”としての地位を確立した。カチューシャの唄の作詞は島村抱月と相馬御風（著名な文学者であり、“春よ来い”をはじめとする童謡や早稲田大学の校歌“都の西北”を作詞した）、作曲は芸術座に属していた作曲家中山晋平。彼は“兎のダンス”や“シャボン玉”などの多くの童謡や、“東京音頭”、“銀座の柳”といった流行歌を創作した当代きっての作曲家だった。

個人的な意見だが、ロシアの文豪トルストイの数多くの作品の中で最も優れている小説は“復活”だと思っている。作中のカチューシャの愛おしいこと、涙した思い出がある。さてカチューシャの唄、これはロシアの歌でもなんでもない日本の歌である。その一番の歌詞を紹介する。きっと一度は聴いたことがあると思う。

♪ カチューシャかわいや わかれのつらさ

せめて淡雪 とけぬ間と

神に願いを（ララ）かけましょうか

今、YouTube で松井須磨子の歌う“カチューシャの唄”を聴くことができる。便利な世の中になったものだ。

カチューシャはロシアなどでよくみられる女性の人名、エカテリーナの愛称形である。エカテリーナの短縮形には他にカーチャなどもあるが、カチューシャはカーチャより親密度が高い呼称とされている。ところで、カチューシャという言葉から何を連想するだろうか？ ロシアっぽい女性名とか、ヘアバンドとか（これは舞台公演で松井須磨子がカチューシャを演じた際に、髪留めを頭に付けた姿からこの名称が定着したといわれる）、それとも AKB48 のミリオンセラー“Everyday、カチューシャ”だろうか。

今回のテーマとして、今や日本でもロシア民謡の代表曲として知られている楽曲“カチューシャ”を取り上げる。一番の歌詞を紹介すると：

Расцветали яблони и груши	リンゴの花ほころび
Поплыли туманы над рекой	川面に霞たち
Выходила на берег Катюша	君なき里にも
На высокий берег на крутой	春は忍びよりぬ

私の世代でも若い頃、新宿に歌声喫茶は少なからず存在していた。個人的には歌集を手にし、指揮者のタクトに従い、合唱することに気恥ずかしさと胡散臭さを感じていたので、一度も足を運んだことはない。“うたごえ運動”という何か政治色や文化プロパガンダを彷彿させるものへの嫌悪がそうさせていたのかもしれない。歌集にはロシアの歌が多かった。“五月のモスクワ”、“ともしび”、“バルカンの星の下で”や“ポーリュシカ・ポーレ”など。でも歌声喫茶に行くぐらいなら、渋谷や新宿に数多くあったジャズ喫茶でコルトレーンを聴く方を好んだ。歌声喫茶で政治色が退行した後でもそれは変わることはなかった。

さてその“カチューシャ”。数年前の産地情報で少しふれている。一部を引用する。

=QT

東京五輪を観ていた人なら、ロシア（参加はロシア・オリンピック委員会=ROC=の個人資格）の選手が金メダルを獲得して表彰台上った時、ロシア国歌ではない別の音楽がかかっていたことに気付いたと思う。この曲は世界的に知られるロシアの作曲家ピョートル・チャイコフスキーが作曲したピアノ協奏曲第1番変ロ短調である。調べてみると、この曲の一部がオリンピック用にアレンジされ、現代ロシアで最も有名なシベリア生まれのチャイコフスキー国際コンクール優勝者のピアニスト、デニス・マツァエフが演奏したものだという。国際オリンピック委員会（IOC）はこの曲を演奏することを正式に認めたが、実は、当初 ROC が提案していたのは別の曲だった。それはソ連の歌曲「カチューシャ」。これは第2次世界大戦中に流行った愛国的な曲で、大祖国戦争の非公式国歌と考えられていた。しかし、IOC はロシア国家との関連性が強いという理由でこの曲を認めなかった。そこで、より中立的なものとして IOC が提案したのが、2020 年が生誕 180 年だったチャイコフスキーの曲だった。

=UNQT

今ではカチューシャはロシア民謡のひとつで、その軽快なメロディから青春ラブソングのように思われているこの歌が、実は“戦時愛国歌謡”だったという事実を深掘りすることを試みる。この曲は 1938 年に発表されたというから、それほど古い歌曲ではない。ソ連が第二次世界大戦に巻き込まれたのは 1941 年 6 月、ナチスドイツ軍の侵攻を受けてからだが、戦時色が濃くなる兆候はドイツによるポーランド進駐時の

1936年にみえ始めていた。そこで国境警備にあたるロシア兵士たちを鼓舞する歌が求められた。ソ連国立ジャズオーケストラのブランデルという芸術監督が、多くの流行歌謡を手掛けていたイサコフスキーに作詞を依頼し、ジャズ調のメロディで作曲した。これがカチューシャの誕生である。当初その歌詞は平和的な一番と二番だけだったが、戦時色が濃厚になる時局には不十分だとの判断のためか、三番、四番が付け加えられることになったという。

【三番】

Ой ты, песня, песенка девичья,	ああ歌よ、娘の歌よ
Ты лети за ясным солнцем вслед	飛んで行け、輝く太陽について
И бойцу на дальнем пограничье	遠き国境に立つ戦士へと
От Катюши передай привет	カチューシャの挨拶を届けておくれ

【四番】

Пусть он вспомнит девушку простую,	素朴な娘を、戦士が思い起こすように
Пусть услышит, как она поет,	娘の歌が届くように
Пусть он землю бережет родную,	彼が故郷の土地を守り
А любовь Катюша сбережет	カチューシャが愛を守り通すように

これらの詞をみると、国境警備隊の兵士とその恋人を主人公にしている様子が読み取れ、一番のような牧歌的な詞とは異なる。ナチスドイツとの大祖国戦争で戦場に赴いている兵士を激励したり、出征する兵士とそれを見送る家族でごった返す駅頭で盛んに演奏されたりしたといわれる。微笑ましい青春ラブソングの元は、戦時愛国歌謡だったのだ。それを知っていたがゆえに、IOCはカチューシャをロシア国家の代替歌として採用することを認めなかった。

YouTubeでさまざまなバージョンのカチューシャを視聴してみた。民族衣装をまとった少女たちが歌う無邪気な映像、ロシアの攻撃で廃墟となったウクライナ・マリウポリの劇場で中国人女性歌手が熱唱する応援歌のようなもの、ウクライナの戦地で北朝鮮兵士が朝鮮語で歌う映像、劇場で軍服姿の男たちが勇ましく合唱するもの、アニメ映像の中で他愛なく流れる歌……。枚挙に暇がないほど数多い。ドイツでは忘却の歌、イタリアでは反政府のパルチザン歌、フランスでは歌って踊るエンタメソングとして使用されている。

日本へは大戦後シベリア抑留帰還者によってもたされたといわれている。実際に抑留された人たちの思いとはきっと異なると思うが、前述した歌声喫茶などでロシア民謡のひとつとして馴染んでいった。多くのコーラスグループも歌唱した。まさか戦時愛国歌謡（軍歌）であるとは知らないように。ゲームやアニメでもBGMとして使用されるケースもみられる。それはそれでいいけど。日本の軍歌もいろいろな場で使用されているし。カチューシャの場合、詞が比較的勇ましくないのも、あまり気兼ねなく広く歌唱されているのかもしれない。

ソ連・ロシアにおけるカチューシャをめぐる受け手側からみた変容はどうかを時系列的に整理する。

- ①誕生時は国境警備にあたる兵士が故郷に残した恋人を想う歌、②ドイツ軍と戦う出征兵士を送る戦時愛国歌謡、③スターリングラードなどでの戦地でみられた前線に送られた女性兵士による戦いの歌（独ソ戦の実態を女性の視線から描きベストセラーになった逢坂冬馬氏の小説“同志少女よ、敵を撃て”は傑作だ）、④大戦後は懐メロソング、⑤ソ連崩壊後には忘却の歌。それが今、ウクライナ侵攻により再び戦時愛国歌謡として復活している。



早川書房

どこの国にもロシアのカチューシャ的な兵士を鼓舞する愛国歌謡は存在する。ひとつ例を挙げるとドイツでは、ナチスドイツの兵士たちに人気のあった“エーリカ行進曲”があった。この曲のタイトルもカチューシャと同様、女性の名前にちなんでいる。そして、歌詞も故郷に残した恋人に想いを馳せる内容だ。メロディも軽快でこの点でもカチューシャと同工異曲といえる。“スターリンのカチューシャ vs ヒトラーのエーリカ行進曲”と称する識者もいる。

これとは少し趣を異にするが第二次大戦の戦地で流行した曲に“リリー・マルレーン”というドイツの楽曲があった。戦地の兵士が故郷の恋人への想いを歌った点は同じである。多くのドイツ兵士が戦地で耳を傾け故郷を懐かしみ、涙を流したといわれている。また、ドイツ兵のみならず敵対する英国兵の間にも流行したため、北アフリカ戦線の英国軍司令部はドイツ軍放送局から流れるこの歌を聴くことを禁じたといわれる。ドイツの歌手であり俳優のララ・アンデルセンが録音したバージョンが欧州全体でヒットし、その彼女の生涯を題材にした映画“リリー・マルレーン”を日本公開時に観たことがある。40年以上前のことだ。興行的には芳しくなかったようだが、個人的としては胸を打たれた思い出がある。因みにこの歌は、ベルリン出身の俳優マレーネ・ディートリッヒの持ち歌としても知られている。彼女は第二次大戦時、既にナチス政権下のドイツを離れ米国の市民権を得ていたが、進んで連合軍兵士を慰問しこの歌を披露したことで、ドイツでは反逆者とみなされた。

最後に“カチューシャ”という兵器について述べ、この項を閉じる。独ソ戦の最中に開発された新型の多連装ロケット砲である。いつの間にかこの兵器はカチューシャと名付けられたという。歌曲の誕生時に近かったことや、このロケット砲に戦局の早い終結の期待と想いを馳せたのだろうか。迫力ある轟音から、ドイツ兵は“スターリンのオルガン”による“死の葬送曲”と恐れられたという。劣勢を強いられたソ連軍を挽回させ、勝利に貢献した兵器だった。カチューシャを歌いながらカチューシャを放ったのだろうか。



カチューシャと名付けられたロケット砲

停戦の目途すらつかないロシアとウクライナの戦い。カチューシャの歌が流れる様子にプーチンは勇気づけられているのかもしれない。

BB) 産地現状 :

ロシア材の市場は需要の停滞感が強く、販売が伸び悩んでいる。需要と供給のバランスは低位安定しており、産地・国内ともに目立った価格変動は見られない。ロシア産アカ松タルキ輸入完成品の産地価格は、1立方メートルあたり580ドル前後を維持している。産地の製材メーカーは、物価高や人手不足を背景に値下げする余力がない状況である。

国内市場では、当用買いが主体で細かい注文が続き、まとまった量の取引は少ない。一部の流通業者では在庫の余剰感も出ているが、全体的な価格は現状維持の傾向が強い。他の輸入材も同様に、入荷量が伸び悩んで販売が低調な一方、一部で値上がりする品目が出る可能性も指摘されている。

6月の東京木材埠頭への入荷量は9,432立方メートルと低調で、他の地域の木材埠頭でも入荷は落ち着き始めている。しかし、出荷も少ないため、一部の現物玉で安値が出ているものの、全体的な価格は安定している。

国内のロシア産アカ松KDタルキの流通価格は、上級品が104,000円から105,000円、中級品が90,000円から95,000円、下級品が72,000円から75,000円で、いずれも前月比横ばいである。エゾ松KDタルキは1立方メートルあたり105,000円前後で推移している。

プレカット工場の不振が木材需要に影響を与えており、流通業者は目の前の仕事の確保に追われ、品ぞろえを充実させる動きが見られる。品質へのこだわりが薄れ、割安な中級品の調達も増えている。現地サプライヤーは値上げの機会をうかがっているため、値崩れは考えにくい状況である。

ニュージーランド関係

AA) 商況/産地現状 :

ニュージーランド(NZ)材の概況として、NZ産ラジアタ松の丸太は、中国の景気低迷による同国向け価格の下落を受け、4月には数年来の安値を記録した。その後、価格は特定の範囲で推移しているが、直近では若干持ち直し動きが見られる。しかし、基調は弱いとの見方が多い。日本向け輸出は6月に再開され、7月以降も同様の傾向が続いているが、需要は総じて低調で、販売数量は前年を下回っている。国内相場も低調に推移している。

製品別では、NZ産ラジアタ松製材の割角は国内で一定の価格帯で保ち合いである。7月積みの3番船が川崎に入港予定だが、需要減少のため、CMPCが単独でコンテナを選択するなど、供給体制に変化が生じている。NZ産ラジアタ松国内挽き製品の割角は、中国経済の低迷やトランプ関税の影響による輸出製造業の荷動き不振が要因となり、しばらく低調な状態が続く見込みである。NZ産ラジアタ松Aソートの丸太は7月が6月と同水準であった。ラジアタ地板(瀬戸内)も6月と同水準で推移している。

地域別に見ると、須崎地区の国内挽きメーカーの荷動きは、4~7月は昨年に比べて改善が見られたが、弱

含みであり、8 月には悪化する懸念がある。7 月の入荷量はほぼ横ばいである。NZ 材と杉を併用するメーカーでは、コスト面で優位な杉材の比率が高まっている。丸太在庫は十分に存在するが、8～9 月の祭りなどで使えないことがあるため、次の本船の入荷が多少前倒しになるとされている。松永地区では NZ 材の低調な荷動きが続いており、高強度を必要とする NZ 材を採用する事業者もいる。次回の松永への丸太入荷は 8 月中旬積み、9 月中旬入番を予定している。名古屋港では梱包材関連の需要が依然として伸び悩んでおり、7 月も荷動きは低調で価格も横ばいである。問屋からは「金回り」の悪さや引き合いの少なさが指摘されている。

BB) トピックス：

1) 「ゴールデン・ビザの“現在地”」：

以前産地情報で“ゴールデン・ビザ”の基準緩和について取り上げた。ニュージーランド投資家ビザは 4 月の法改正以来、大変な活況となっているという。この情報については、日本の各紙でも大きく掲載されていた。まだわずか 3 カ月しか経過していないが、40%以上の申請者がアメリカ国籍であるという事実が明らかになっている。申請者の投資額総合計は 13 億 NZ ドル（1100 億円）にも上るといふ。NZ 政府が移民局のホームページで発表・更新しているこのビザの国籍別申請状況は次の通りである。主要国をピックアップした。

nationality (国籍)	Applications received (申請受付)	Number of people (人数)
中国	30	98
ドイツ	18	72
台湾	25	71
日本	4	12
シンガポール	8	30
ロシア	3	12
米国	95	288
合計	214	693

日本国籍の申請は 4 件で、今後ますます増加するとみられている。専門家の分析によれば、通常このような投資移住ビザの傾向として最も多いのは中国系の国籍であるらしいが、NZ 投資家ビザは数字が示すように米国国籍の誘致に成功しており、非常に特筆すべき状況だといふ。これは、米トランプ政権に対する不安や地政学的なリスク回避、先進国の堅実な法整備、緩和された税制優遇やビジネスのしやすさ、そして何よりも“永住ビザでありながら居住しない状況になったとしても一生維持できる”というメリットのある最大の強みから NZ は多くの富裕層を惹きつけているとみるべきだろう。資金だけでなく米国からは頭脳も流出していくだろう……。ロシア国籍の 3 件もプーチン・ロシアからの回避だろう？

2) 「クック諸島」：

クック諸島は、タヒチとフィジーの中間に位置し、赤道の南、日付変更線の東にある南太平洋に浮かぶ 15 の島々から成る国である。英国保護領やニュージーランド領を経て 1965 年、外交・防衛を NZ に委任する

自由連合協定を結んだ。内政自治権は持っているが、外交と防衛は NZ が責任を負っている。面積は大阪市とほぼ同じ。英国国王が元首で、政府は首相が率いている。国連には加盟していないものの、独自の外交関係を締結している。因みに日本とは 2011 年に国交を樹立した。

NZ 政府は、最近その島嶼国クック諸島への資金援助を打ち切った。今年 2 月に、クック政府が財政や外交、防衛を支える NZ と事前協議せず、中国と協力協定を結んだことにラクソン NZ 首相らが不快感を示したことに呼応している。NZ 政府は 2025～26 年会計年度に予定していた 1820 万 NZ ドル（約 15 億 8 千万円）を拠出しないことを決め、先日クック諸島のブラウン首相に通告したという。クック諸島が NZ による協議要請を無視し、海底資源探査やインフラ整備を含む広範な分野の協定の締結に踏み切ったことを批判、財政支援の前提となる“強固な信頼関係に基づく二国間関係”が損なわれたと指摘している。

ラクソン首相は中国と特に経済分野での協力体制を推進しているなど、安全保障問題に配慮しながら、中国との関係を重視する方針を就任以来明らかにしてきた。それだけに、事前協議がクック島からなされていれば、別の方策がとられたと思う。けじめが必要だということだろう。

欧州関係

AA) トピックス：

1) 「フィンランディア」：

ロシアと約 1300 キロにわたり国境を接するフィンランドが先日、対人地雷の使用や製造などを全面的に禁じた“対人地雷禁止条約（オタワ条約）”から脱退する方針を表明した。フィンランドは 2012 年にオタワ条約を批准したが、ロシアのウクライナ侵攻後、安全保障環境の変化を受け、条約からの脱退を求める市民運動が起こり、5 万人以上の署名が集まっていた。バルト 3 国やポーランドも先に同条約から脱退している。これらの国は NATO 加盟国であり、スウェーデンを含むバルト海沿岸諸国は“NATO の海”となりロシアに対峙する構えだ。

オタワ条約脱退が意味するものは何だろうか？ 対人地雷は操作が簡単なうえ、安価で効果的な兵器といわれる。長大なロシア国境を徴兵制の兵士で守らなければならないフィンランドでは対人地雷は必要との声もともとあった。人道的見地からその意見は封じられていたが、ロシアによるウクライナ侵攻で欧州の安全保障を巡る状況は大きく変わった。政府内には「国際協調や人道面で非常に大きなマイナス」という議論もあったというが、熟慮の末に結論を出したという。世論調査でも「脱退やむなし」と考える国民が多数だという。

ソ連（ロシア）とフィンランドの関係は、第二次大戦後“くっつかず離れず”の中立姿勢を保っていた。それはフィンランド化（Finlandization）と呼ばれ、「フィンランドは民主制と資本主義を維持しつつも、ソ連やロシアの意思には絶対反抗しない」という前提に従い、1948 年からフィンランドが EU に加盟した 1995 年の 47 年間、もしくは同国が NATO に加盟した 2023 年までの 75 年間にわたって執り続けてきた外交政策を指している。フィンランドには旧ソ連と冬戦争（1939～40 年）、継続戦争（41～44 年）を経験した歴史がある。これによりフィンランドは領土の 1 割を失い、巨額の賠償金を負う。また、冷戦時代はソ連と良好な関係にない政治家はフィンランドの指導者になれないなど、事実上の内政干渉もあえて許容し

てきた。それゆえに、二度戦ったにもかかわらずソ連に占領されることなく、独立を守ることができた。冷戦中も仮想敵国・ソ連からの圧力をうまくかわし、かつ侵略に常に備えてきた。フィンランドの人々は“手足を切って胴体を守った”と表現している。

そもそもフィンランドはその地政学上、スウェーデンとロシアの狭間にあり、支配者が入れ替わってきた歴史を持つ。帝政ロシアの支配下にあった頃、作曲家シベリウスによる交響詩“フィンランディア”が示すように、作曲された 1899 年当時のフィンランド大公国は帝政ロシアの圧政に苦しめられており、独立運動が起こっていた。シベリウスが作曲した当初の曲名は“フィンランドは目覚める (*Suomi herää*)”だった。この曲は、フィンランドへの愛国心をかきたてるとして、帝政ロシア政府はこの曲を演奏禁止処分にしていった。交響詩フィンランディアの冒頭、金管楽器とティンパニの奏でる旋律は苦難を表わすようだ。そのうち木管楽器の柔らかい響きが人を包み込む。そして弦楽器の登場は大地を響かせる。やがて各楽器群が集合し大きな響きを帯びてくる。この楽曲は不穏な雰囲気から始まるが、その後の旋律はファンファーレの爆発力を伴って、輝ける未来に一直線に向かう勇ましさに溢れていく。聴くにつれて次第にテンションが上がってくる。未来の勝利を予感させる疾走感は感動的だ。フィンランドの森と湖をはじめとする人を優しく包み込み自然の豊かさを感じとることができる名曲だ。

時を経て、この交響詩の木管楽器による旋律に歌詞がつけられ、合唱向けに編曲した“フィンランディア賛歌 (*Finlandia Hymn*)”が誕生した。これはフィンランド愛国の歌との位置付けもあり第 2 の国歌として愛唱されている。作詞したのはフィンランドの詩人コスケンニエミ (*Koskenniemi*)。誕生した 1941 年当時、フィンランドは先に述べた隣国ソ連の侵略により国家存亡の危機にあり、ロシアに対抗して奮起するフィンランド国民の決意に満ちた熱い魂が歌詞の内容にも反映されている。

* 一番のみを紹介すると：

<i>Oi, Suomi, katso, sinun päiväs' koittaa,</i>	おお、スオミ(フィンランド国民の自称) 汝の夜は明け行く
<i>Yön uhka karkoitettu on jo pois,</i>	闇夜の脅威は消え去り
<i>Ja aamun kiuru kirkkaudessa soittaa,</i>	輝ける朝にヒバリは歌う
<i>Kuin itse taivahan kansi sois'.</i>	それはまさに天空の歌
<i>Yön vallat aamun valkeus jo voittaa,</i>	夜の力は朝の光にかき消され
<i>Sun päiväs' koittaa, oi synnyinmaa.</i>	汝は夜明けを迎える 祖国よ

因みにフィンランディアは、ブルース・ウィリス主演のアメリカ映画“ダイ・ハード 2”でエンディング曲として使用された。同作品の監督はフィンランド出身のレニー・ハーリン。昨年公開された三谷幸喜監督の映画“スオミの話をしよう”のエンディングシーンで、長澤まさみ扮するスオミが華麗に歌い踊り、出演者全員が参加した話題のミュージカルシーンのナンバーはフィンランドの首都である“ヘルシンキ”。今でも頭から離れない。でもこれはシベリウスとは全く関係ない。念のため。

話を歴史から今に戻す。フィンランドはロシアに強い警戒感と不信感を持っている。昨年 11 月、ロシアとの国境に突然、中東やアフリカなど第三国の越境者が押し寄せた。フィンランドはロシアの工作だとして国境を閉鎖したにもかかわらず、約 1300 人が越境したという。フィンランドとロシアとの国境にはフェンスが建設されているが、このフェンスの建設は、ロシアが難民申請者を意図的に送り込んでいるという政府の認識に基づいていた。東部地域では、ロシアによるとみられる GPS (全地球測位システム) 攪乱

が続いており、サイバー攻撃も日常的に起きている。ウクライナ侵攻以降、フィンランドをはじめ北欧、バルト3国、ポーランドなどは“次のロシアによる侵略に備えねばならない”という認識を一層強くしている。二次大戦後、大国間で勢力圏が線引きされ、フィンランドや東欧諸国はその犠牲になった記憶が残っている。戦後、国際社会は“国家主権”“領土の一体性”“人権”“自由”など国際法の支配を少しずつ広げてきた。ゆえに、ウクライナ戦争がこうした原則を踏みにじる形で終われば、力による勢力圏拡大の時代に世界が逆戻りしかねないと危惧している。「欧州の安全には米国の関与が不可欠だが、米国が関与できなくなる事態に備え、欧州は防衛努力を抜本的に強化し、米国への依存度を減らさねばならない」という考えが欧州で持ち上がっているが、ロシアに地理的に近い国ほどその危機感が強い。

つい最近のこと、ロシアとベラルーシの国民による不動産購入を禁止する法律が施行された。フィンランドの安全保障を強化し、あらゆる影響力工作に備えるとの考え方だとされている。フィンランドは2020年、欧州連合（EU）域外の個人や企業の国内不動産の購入について、国防省による許可制を導入し、“安全保障上の脅威”とみなした場合は、国家が購入を阻止できる態勢を整えていたという。ロシアの侵攻後に強化した入国規制により、国境を越えたロシア人の不動産取引の割合は減ったというが、それでも去年は121件の取得申請があったという。今回施行された法律は、ロシアが諜報・工作活動をするための拠点を持ち、フィンランドに対する広範かつ敵対的な影響力を有することを防ぐ狙いがあるという。一方、同国には長らく同国に暮らすロシア系住民も多く、フィンランドや他のEU加盟国の永住許可証を持つ場合、許可を得た上で不動産を購入できるとしている。

フィンランドは常にロシアへの警戒感を捨てず、強い国防体制を維持してきた国で、政府や軍だけでなく、企業も団体も市民も国防の責任を担っている。緊急避難用のシェルターは5万カ所以上あり、国民の85%を収容可能だという。その一方、幸福度は8年連続で世界トップ。高福祉で女性の社会進出も進んでいる。厳しい環境の中で、危機感を持って最悪の事態に備えながら豊かな社会をつくってきたといえよう。

戦争への恐怖、福祉国家が維持できないかもしれないという不安、人口減少と労働力不足、排外主義の扇動といった課題がフィンランドにあるといわれ、日本との類似点もみえる。隣国ロシアへの恐怖は“ロシア人”への差別と共存している。フィンランドには、ロシア帝国からの独立以前からの住民、ソ連崩壊後の移住者、今のロシアに疑問を感じた移住者などさまざまな背景を持つロシア語系住民がいる。ロシア語話者のウクライナ人もいる。しかし彼らはロシア人としてひとくくりにされ、脅威と結びつけられ差別されている。我が国でも日本ファーストならぬ“日本人ファースト”を掲げる政党が先の選挙で注目を浴び躍進した。ドイツの極右政党“AfD（ドイツのための選択肢）”を擁護するものも多数ある。双方とも民族主義、反グローバリズム、伝統的な男女観で共通する。リベラリズムを“時代遅れ”といって揺さぶるプーチンとも主張が重なる。プーチンの強い男性的なイメージと進歩的な現代性に対するその敵意は、リベラルな民主主義が台頭する自国で喪失感を味わう人びとに強い共感を生んでいるのかもしれない。あのトランプですらアメリカ・ファーストに留まっている。日本人ファーストという排外思想は、欧州でみられる自国人第一主義で難民、移民を排除する政治勢力の伸長に影響を受けているのかどうかは分からないが、ブームに便乗した一過性の出来事だと信じたい。

2)「ケイト・ブッシュ」:

最近ケイト・ブッシュの楽曲をよく聴いている。1970年代後半から活躍する英国のシンガーソングライターだ。彼女の曲はジャンルにとらわれない自由な発想で、ポップやプログレッシブ・ロック、フォーク、

民族音楽など、さまざまな要素を融合させている。歌詞は、文学的で詩的であり、時に哲学的なテーマや神話、歴史、心理学、自然などを題材にする。登場人物の心情や情景が鮮やかに描かれ、リスナーをまるで短編小説の世界に誘うようだ。そして歌唱。4 オクターブを超えるといわれる広い声域と多様な歌唱法を使い分ける。繊細で囁くような声から力強いシャウト、オペラ歌唱のようなものまで、楽曲の感情を豊かに表現する。なにか高尚な気分させてくれるケイト・ブッシュが気に入っていた。

ふと想いを巡らしていたとき、ケイト・ブッシュが英国のプログレロックバンド“ジェネシス”の初代ボーカリスト、ピーター・ガブリエルとデュエットした曲が脳裡を過った。その思い出とは。新しもの好きの友人がレーザーディスクプレーヤーをいち早く手に入れ、ピーター・ガブリエルが 1986 年に発表したアルバム“So”を観た。そしてその中の楽曲“Don't Give Up”にケイト・ブッシュが登場した。彼女には以前から 1978 年のデビュー曲“嵐が丘”（エミリー・ブロンテの小説“嵐が丘”に着想を得て書かれ、ケイト・ブッシュの甲高く神秘的なボーカルが、キャサリンの魂がヒースクリフを呼び求める情景を見事に表現していた）や“ライオンハート”、“バブーシュカ”などの曲で親しんでいた。“Don't Give Up”は、そのタイトルの通り“諦めないで”という力強いメッセージが込められ、失意や絶望に直面したときに人を優しく包み込む力と癒しに満ちた作品だった。歌詞は、経済的な困窮や社会からの疎外感に苦しむ男性の視点で語られ、彼の苦悩に寄り添いながら“あなたにはまだ価値がある”、“ひとりじゃない”と静かに励ます女性の声が交互に現れ、それに合わせ映像では立ったまま抱き合いながら男女のパートごとに、うっとりした表情が“視聴者”に向けられる。この構成がすばらしかった。個人の内的な孤独と他者からの支えという対比を明確に浮き彫りにしていた。この曲は、1980 年代半ばに米国で社会問題化していた失業率の上昇と、経済格差の拡大を背景に制作されたといわれている（一方、日本ではバブル景気。トランプはこの時代の日本を嫌悪していた）。ピーター・ガブリエルは、ある写真家による大恐慌時代の米国の記録写真集に影響を受け、特に貧困や疎外された人々の表情からインスピレーションを得たと語っている。

歌詞の一部を紹介する。簡単で単純な英詞なので訳なしで。

[Peter]

*In this proud land we grew up strong
We were wanted all along
I was taught to fight, taught to win
I never thought I could fail
No fight left, or so it seems
I am a man whose dreams have all deserted
I've changed my face, I've changed my name
But no one wants you when you lose*

[Kate]

*Don't give up
'Cause you have friends
Don't give up
You're not beaten yet
Don't give up*

I know you can make it good

[Peter]

*Though I saw it all around
Never thought that I could be affected
Thought that we'd be last to go
It is so strange the way things turn
Drove the night toward my home
The place that I was born, on the lakeside
As daylight broke, I saw the earth
The trees had burned down to the ground*

[Kate]

*Don't give up
You still have us
Don't give up
We don't need much of anything
Don't give up
'Cause somewhere there's a place where we belong
Rest your head
You worry too much
It's gonna be all right
When times get rough
You can fall back on us
Don't give up
Please don't give up*

まさに他愛のない単純な言葉。ケイト・ブッシュが紡いでいたらもっと複雑な言葉の羅列になっていただろう。でもこの単純明快さは、メロディと映像が相まって感動を覚えた。初めて観るレーザーディスクの鮮明な映像にも感動したし。



最後に少し蘊蓄めいたことを。先に述べたケイト・ブッシュの楽曲“バブーシュカ (Babooshka)”は、ロシア語で“おばあちゃん”を意味するタイトル。実際の発音では“バーブシカ (бабушка)”の方が近い。

歌詞の内容は、夫の貞節を試すために、バブーシュカという偽名で夫にラブレターを送る妻の物語。彼女はかつての自分とは違う若々しく魅力的な女性を演じ、夫がそれに惹かれるか試そうとする。結果的に、彼女自身のパラノイアが関係を破綻させてしまうという皮肉なストーリーだ。ドラマチックな展開が面白い。ケイト・ブッシュ独特のドラマチックで幻想的な雰囲気と、感情豊かな歌声が印象的な楽曲だ。MV も非常に特徴的でバブーシュカのような姿と、艶やかな衣装の姿が交互に現れる演出が話題になった。是非とも YouTube で。

BB) 欧州材状況 :

欧州材の日本市場は、2025 年 5 月以降、入荷量が増加し需給は緩和傾向にある。しかし、円安の影響で輸入コストが上昇しており、特に 7 月中旬の円安水準が続けば、今秋以降の輸入コストはさらに上昇する見込みである。構造用集成材の第 3 四半期契約分は価格がほぼ横ばいである一方、ラミナは円安を背景に価格調整が行われた。8 月以降は産地価格の上昇により、さらに約 3,000 円高くなる可能性も指摘されている。

各地域の状況は以下の通り。

- **関東市場（東京）** 7 月は盆前の需要の盛り上がりを実感されず、国内集成材メーカーは値上げ交渉を行い、国内産の W ウッド・R ウッド構造用集成材の中心値は前月比 1,000~2,000 円高となった。東京港の欧州材在庫は増加傾向にあり、特に W ウッド間柱は在庫が充足し、値動きは一服している。8 月以降、輸入コストは上昇する見込みだが、現状の需要環境では売値への転嫁は厳しいとの声が多い。
- **関西市場（大阪）** プレカット工場の稼働は多少改善しているものの、構造用集成材の荷動きは低調である。建築需要の低迷により在庫消化が進まず、国内集成材メーカーへの発注が減少傾向にある。R ウッド集成平角は値上げが順調に浸透し、安値も切り上がっている。W ウッド集成管柱の再値上げは難しいと見られ、W ウッド KD 間柱は品薄サイズほど高値寄りである。
- **名古屋市場** W・R ウッド集成材はメーカーの値上げに連動して価格が上昇している。W ウッド間柱は調達価格が上昇しているものの、競合材である杉間柱の影響で価格は保ち合いである。9 月以降は物件が増加するとの見方がある。
- **東北市場** 欧州材輸入製品の入荷が続く中、国内産 W ウッド・R ウッド小断面材は引き合いが継続している。建築基準法改正に伴う建築確認申請の遅れで住宅需要は落ち込んでいるものの、今後は遅れ分の工事が出てくる見込みである。国産の W ウッド集成管柱・桁などの価格は強保ち合いで推移している。
- **北海道市場** 非住宅案件は一定数あるものの、住宅は伸び悩み、欧州材の消費は停滞傾向にある。建築基準法改正により W ウッド集成材の使用は増えているが、杉集成材の利用拡大も進み、W ウッドのシェア拡大は鈍化している。非住宅では道産集成材の利用比率が高く、コンビニ店舗の建設でも国産材の採用が進んでおり、非住宅案件が増えても欧州材の需要には直結しにくい状況である。

北米関係

AA) トピックス：

1) 「モノクロ映画たち」：

モノクロ映画にはたくさんの思い出がある。映画草創期は技術的にモノクロとならざるを得なかったが、カラーの時代を迎えてもモノクロにこだわりをみせる映画製作者は数多く存在している。モノクロ映画には、単なる古い表現方法というだけでなく、現代のカラー映画にはない独自の効用と魅力があると思う。色が排除されることで、観客は多方面に意識を向け、より深く作品を堪能することが可能である。その効用として、まず非日常性・物語性を強調することがあげられる。私たちの日常はカラーで溢れているが、モノクロ映像はそれ自体が非日常で観客を物語の世界へと誘う効果がある。現実から切り離された感覚は、作品が持つ寓話性や神話性を際立たせ、より集中して物語に没入することを促す。次に光と影を際立たせる。色の情報がなくなること、映像の中の光と影がより鮮明に象徴的に浮かび上がる。モノクロ映像はコントラストが強く、被写体の輪郭や質感を強調し、奥行きや立体感をより強く感じさせる。これにより、情景や登場人物の感情がダイレクトに伝わることもある。さらに、カラー情報が少ないため、観客は登場人物の表情や衣装のディテール、背景の構図など、他の視覚的要素に注意を向けやすくなる。観客自身の想像力が刺激され、作品に積極的に関与する余地が生まれる。他にも時代性やノスタルジアの表現に優れていることもあろう。

今回は、過去に観た米国のモノクロ映画作品のお気に入りたちを紹介する。

チャップリンの“独裁者”。彼が監督した作品は 1 作を除いてすべてモノクロ作品だった。技術的なこともあったようだが、モノクロ映画の効用をよく理解し、それを効果的に作品の哲学に落とし込んでいった。何とんでもこの映画の真骨頂は最後の演説だろう。人類、自由、希望、そして団結の重要性を強調する力強いメッセージだった。支配や征服ではなく、互いに助け合うことの重要性を訴え、憎しみや軽蔑ではなく、幸福を分かち合うことで生きるべきだと述べる。共感への呼びかけだ。そして、貪欲が人々の魂を蝕み、世界を憎しみと流血で満たしたと指摘し、知識は皮肉を生み、巧妙さは不親切さをもたらしたという。さらに人間性の必要性を強調した。つまり機械よりも人間性、巧妙さよりも優しさと思いやりが必要であるとし、これらの資質がなければ、人生は暴力的になり、すべてが失われると警告する。“モダンタイムス”にも共通するテーマだ。希望と独裁者への抵抗にもふれている。絶望している人々に対し、現在の悲惨さは貪欲が過ぎ去る一時的なものであり、独裁者は滅び、権力は人々のもとに戻ると励ます。兵士たちに対して、彼らを軽蔑し、奴隷にし、大砲の餌食にするような“機械人間”のために戦うのではなく、自由のために戦うよう促した。そして、民主主義の名の下に、人々が団結し、国家間の障壁、貪欲、憎しみ、不寛容を取り除く新しい世界のために戦うことを呼びかける。科学と進歩がすべての人々の幸福につながる世界を提唱したものだ。

トメニア国の独裁者アデノイド・ヒンケル大統領と取り違えられたユダヤ人の床屋の親父の演説はまさに感動的だ。製作当時はホロコーストの現状はまだ知らされていなかった。そして、演説についてアメリカなどの右翼勢力は「共産主義者の陰謀である」として強く反発したという。何をめでたい綺麗ごとを語っているのだということだろうか。また 1929 年の世界大恐慌によって黒人やユダヤ人を迫害する KKK（クー・クラックス・クラン。米国の秘密結社、白人至上主義団体）を中心とした右翼が米国をはじめ先進諸国で台頭したため、そのことも“独裁者”に対する反発を促進させることになったという。

次に“ペーパー・ムーン”。1973年に公開された。ピーター・ボグダノヴィッチ監督作品で、1930年代の大恐慌期の米国中西部を舞台に、言葉巧みに聖書売りつけながら各地を渡り歩く詐欺師の男モーゼと、孤児となった少女アディが旅をする中で絆を深めていくロードムービーだ。ライアン・オニールとティタム・オニール（実の親子）が主演を務め、ティタムはこの作品で史上最年少のアカデミー助演女優賞を受賞したモノクロ映像が特徴的な映画だった。“It's Only a Paper Moon”は、映画のタイトルにもなったジャズのスタンダードナンバー。この曲は、「たとえそれが紙でできた月であっても、信じる心があれば本物になる」という意味合いがあり、夢や希望、そして信じることの力を歌っている。映画の世界観を象徴する曲といえる。みどころは、全編モノクロで撮影することにより、大恐慌時代の雰囲気を見事に表現し物語に深みとノスタルジアを加えていること、詐欺師であるモーゼと、大人びた賢さを持つアディのユーモラスでテンポの良い掛け合いがあげられるだろう。疑似家族を実の親子が演じる面白さ、そして詐欺という違法な行為をしながらも、どこか憎めないモーゼと、大人びたアディのキャラクターを通して、人々のずる賢さや純粋さ、そして生存への執着といった多面的な人間性が描かれていた。米国の大恐慌時代といえば、ソ連はそれを指し社会主義が資本主義を凌駕したと喝采したといわれている。そして恐慌前の好景気時に計画し恐慌を経て完成したエンパイア・ステートビルには、テナントが入らず、“エンプティ・ステートビル”と揶揄されたという。ライアンは“ある愛の詩”で一世を風靡したが、ティタムが天才子役と称され注目を浴びたことにより、嫉妬にかられたのか、その後アルコールや薬物に溺れていく。またティタムも子役で活躍しちやほやされた末路によくあるように、演技に悩み薬物に手を出す。映画のラストシーンの感動と実生活の充実さはほど遠い。

巨匠スタンリー・キューブリック監督の英米合作映画“博士の異常な愛情 または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか (*Dr. Strangelove or: How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb*)”。冷戦下の核戦争の恐怖をテーマに、それを極めてシニカルなブラックコメディに仕立て上げることで、観客に強烈なメッセージを投げかけた。核戦争の愚かさの不条理さの風刺を描く。たった一人の将軍の狂気により核戦争が始まりかねないという極めて現実離れしているようでいて現実の冷戦下では十分起こりうる危険性を、滑稽なまでに誇張して描いた。軍人や政治家たちの間のコミュニケーションの不全や無能さ、そしてそれぞれのエゴや偏見が、地球規模の破滅へとつながっていく過程を徹底したブラックユーモアで表現することで、核戦争がいかに愚かで不条理なものであるかを痛烈に批判する。さらに核戦争を阻止しようと奔走する大統領や科学者たちも、結局は自分の保身や組織の論理にとらわれ、突発的な事態に対応しきれない。高度にシステム化された核兵器の管理体制が、結局は人間の感情や判断ミスによって容易に破綻してしまうという人間の理性やシステムの限界を私たちに突きつけた。

“博士の異常な愛情”というタイトルが象徴するストレンジラヴ博士（“ピンク・パンサー”シリーズで名を馳せたピーター・セラーズが怪演）は、元ナチスの科学者であり、核戦争後の地下帝国建設に興奮を覚える。これは、冷戦というイデオロギー対立の陰で、ファシズム的な思想が再燃する可能性へのキューブリックの痛切な危機感を表現したと解釈されている。映画に登場する米国大統領や軍の将軍、ソ連の指導者など、権力者はみな滑稽で無能、あるいは偏執的で、到底世界の命運を預けられるような存在ではない。キューブリックは、彼らが世界の命運を決定する立場にあること自体への皮肉と彼らへの不信感も描く。最終的に人類が滅亡するという救いのない結末を、陽気な音楽と核爆発の映像で締めくくすることで、絶望的な状況を笑い飛ばすというブラックユーモアの極致を示している。これは、核戦争の現実に対する一種の諦念を表現したのだろう。核戦争の持つ恐ろしさや、それを引き起こす人間社会の病理を、笑いという

形で鋭くえぐり出した奇妙な作品だった。

“未知への飛行（原題：Fail Safe。邦題では何やら分からないので原題も記した）”は、私の大好きなシドニー・ルメット監督によるポリティカル・サスペンス映画。この映画についてはかつて産地情報で一部紹介したことがある。

=QT

シドニー・ルメット監督作品のひとつ“未知への飛行”。これは、米ソの核戦争危機を扱ったもの。システム障害によって、ソ連爆撃命令が出されてしまう。あるポイント“フェイルセーフ”を超えると、爆撃機は帰還命令を受け付けられなくなる。米大統領は、ソ連に爆撃機の撃墜を要請するが、そのうちの一機はモスクワに到着することが確実。ここで大統領は重大な決断をする……。身の毛もよだつような結末が待っている。劇中のトップ決断の大事さは、今の日本の危機管理のなさを思うと……。モノクロ撮影された映画で、それがより一層“ドキュメンタリーチック”な雰囲気醸し出し、背筋を凍らせた。今の米ロ、米中関係をみると、ほんのちょっとした手違いで、一触即発、重大事故の発生する危惧を覚える。一国のトップに権力が集中すると独裁的な振る舞いが起こりがちである。それに対処するのは市民たちの強い思いと、それを為政者にノーをたたきつける媒体である。それが現実ではどうか。

=UNQT

この映画の最も重要なテーマは、システムのエラーや誤作動によって、意図せず核戦争が勃発してしまう可能性への警告だ。コンピュータの故障により誤った核攻撃命令が発令され、それを止められない状況を描くことで、当時の冷戦下の核抑止体制が持つ潜在的な危険性が強調されている。“フェイルセーフ”とは、装置の誤操作や誤動作による事故を防ぐための設計思想を指すが、この映画ではそれが機能しない、もしくは予期せぬ形で裏目に出てしまう恐怖を描いた。高度なテクノロジーや軍事システムが、一度でも誤作動を起こすと人間の手に負えなくなるという技術への過信に対する警鐘も込められている。人類の作り出したシステムが、人類の破滅を招く可能性をも示唆している。さらに米国大統領が、核戦争を回避するために下さざるを得ない、想像を絶するような苦渋の決断をするさまも描かれている（ヘンリー・フォンドが好演）。これは、国家の最高責任者が究極の状況でいかに倫理的な選択を行うことができるかという政治的・道徳的な問いを投げかけているといえよう。

当時、米ソ間の核抑止力は“相互確証破壊（Mutual Assured Destruction）”という概念に基づいていた。これは、どちらか一方が核攻撃を行えば、報復により両国が壊滅するという考えで、それが核戦争を抑止するとされていた。しかし、この映画は、偶発的な事故によってその抑止力が機能しなくなる可能性を示し、“MAD”の概念（この略称はまさに皮肉）は必ずしも絶対的な安全をもたらすものではないという空虚さを訴えている。誤った命令が発令された後、米ソ間のホットラインでの緊迫したやり取りは秀逸。相手に状況を理解させ、協力して危機を乗り越えようとするものの、不信任や情報伝達の限界が、事態をさらに困難にすることを浮き彫りにした。同時期に公開された前述の“博士の異常な愛情”が同じテーマをブラックユーモアで描いたのに対し、この作品は非常にシリアスかつ現実的なトーンで、核戦争の生々しい恐怖と、それが引き起こす人間の苦悩を深く訴えかけている点が特徴といえよう。

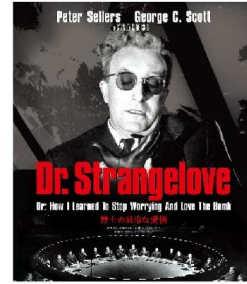
核兵器を含めた武器を所有している現状、これは一般に戦争の抑止力の観点からとらえられることが多い。だが、一般市民の健康と福祉に消費すべき貴重な財産を安全保障の理由で、為政者や軍事関係者の“玩具”のために費やされることには大きな疑問を感じる。如何なるチェック機能を設けていても、ヒューマン・エラーによって、取り返しのつかない事態を招くことは多々ある。これを“未知への飛行”は明示している。何度も紹介しているので恐縮だが、ロシアの作家・チャーホフの言葉を再び披露したい。これは“チャーホフの銃”と表現される。「ストーリーに持ち込まれたものは、すべて後段の展開の中で使わなければ

ならず、そうならないものはそもそも取り上げてはならないのだ」。含蓄ある言葉だ。

“夜の大捜査線”という映画があった。この映画の主なメッセージは、1960年代のアメリカ南部における根深い人種差別とその克服、そして異なる背景を持つ人間同士の理解と協力の重要性だとされる。日本のテレビドラマ“踊る大捜査線”はきっとこの作品から題名の一部を拝借したのだろう。物語の舞台のミシシッピ州の田舎町スパルタで主人公の黒人刑事（シドニー・ポアチェが恰好いい）が、その能力とは裏腹に白人住民から激しい差別や偏見に晒される。“ボーイ”とか“ニガー”といった差別的な言葉が浴びせられ、その服装や立ち居振る舞いですら偏見の対象となった。映画では、このような差別がいかに非生産的で、時に暴力的な結果を招くかを浮き彫りにする。黒人刑事は、人種差別が蔓延する環境の中でも、冷静沈着かつ卓越した捜査能力を発揮する。白人の警察署長（ロッド・スタイガーのいやらしい演技）は、当初は黒人刑事に対し差別的な態度をとるが、彼の能力を目の当たりにするにつれ徐々にその認識を改め、協力関係を築く。これは、人種に関係なく、個人の知性や能力を正當に評価することの重要性を示している。当時は公民権運動の時代。映画が公開された1967年、米国で公民権運動が活発に行われ、人種差別撤廃に向けた動きが進んでいた時期に当たる。この映画は、当時の社会問題に鋭く切り込み、その解決に向けた希望を描いた作品として大きな意義を持っていた。単なる刑事サスペンスとしても十分楽しめる作品だが、人種差別という重いテーマを扱いながらも、人間同士の信頼と理解が困難な状況を乗り越える力になることを示唆する社会派のメッセージ性の強い作品だった。

大勘違いをしていた。この映画はモノクロ映像だと思っていた。公開年代が1967年ということもあり思い込んでいた。1960年代はカラー映画が主流になりつつあった時代ではあるが、それ以前のハリウッド黄金期やフィルム・ノワールの多くは白黒映画だったことや、“昔のサスペンス映画＝モノクロ”という漠然としたイメージが私に植え付けられていたのか、それとも最初に観たのが白黒テレビだったことが影響していたのか。その後も再三観ていたのに……。それ以上に白人と黒人の人種差別もひとつのテーマだったため、“白黒”のイメージが無意識のうちに結び付けられていたのかもしれない。1960年代後半から1970年代にかけての“ニュー・ハリウッド”（日本では“アメリカン・ニューシネマ”と呼ばれた）の時代には、旧来のハリウッドとは異なる、よりリアリズムを追求した作品が多く生まれていた。あえてモノクロで撮影することで、ドキュメンタリーのような質感を追求したり、特定の時代背景を表現したりする作品もあった（“ペーパー・ムーン”のように）。“夜の大捜査線”もその時代の流れの中に位置する作品であるため、新しい表現としてのモノクロ映画のイメージと混同してしまった。

権威主義的政治体制への嫌悪、反DEIの動き、核抑止力論争などにかかわるモノクロ映画を紹介した（一部は誤解していたが）。カラーではなくモノクロで映画製作することで、観客の想像力を求める。観客も物語に没入することができ、対象課題を深く考察することができる効用がある。映画にとってカラー描写という武器を待たされない登場する俳優陣もモノクロでは表情ひとつとっても、より深く演じることが求められる。



左から“独裁者”、“ペーパー・ムーン”、“博士の異常な愛情”



“未知への飛行”（左）、“夜の大捜査線”（右）

2)「トランプ関税」:

あちこちで詳しく報道されているので、今回テーマにするのはどうかと思案したが、何か釈然としない点について少々ふれておきたい。

米国の高関税措置を巡る日米交渉が、参院選後に電撃合意された。日本の財界など関係者やマーケットでは好感している。内容はともかく、先行きの不透明感がとりあえず払拭されたことがそれにつながっているのだろう。この水準の関税率なら何とか対応できるとか、トランプさんもよく理解してくれたとか、日本側の交渉は粘り強くよくやったといった声がきかれている。

でも天邪鬼はこの交渉自体には疑問を抱いている。そもそも高関税はトランプ政権が通商ルールを無視して決めたもので、日本側として全て撤回するのが筋だ。最大の対米投資国である日本の貢献も過小評価されている。今回の合意は、日本側の交渉の誠意がみられたので、“この辺りで手をうってやった”という“おためごかし”である。それを“どうもありがとう”と軽々に述べたくはない。トランプは各国との関税交渉に焦りがあった。中国との関税交渉が迫る時期、日本の政権交代が起こる時期を考慮しての電撃合意だったといえる。

“エプスタイン文書”をめぐるトランプ政権の対応が、今米国では最もホットな話題だ。これは、米国の資産家ジェフリー・エプスタインが未成年の女性たちを性的に人身売買した事件に関する捜査資料や関連文書のことだ。この咎で、彼は2019年に性的人身売買などの罪で逮捕され、勾留中に死亡している。彼の死後も、ことの真相や彼と交流のあった著名人たちの関与について、大きな注目を集めていた。文書には政財界の有力者や著名人の名前が複数回登場しているとされる。これに対し、事件の全容解明を求める声に応じて文書の公開が何度も行われているが、その内容を巡ってはさまざまな憶測や陰謀論が飛び交っていた。特に、エプスタインの死因や彼が顧客リストを保有していたかどうかに関心が高まっていた。関連文書にトランプの名前が複数箇所に記載されていたとも報じられており、司法長官が最近トランプにこれを報告し、結果、文書を公開しない方針が出されたと報じているメディアもある。だが、ホワイトハウス

はこれをフェイクニュースだと否定している。文書に名前があるからといって、不正行為の有無を示すものではないと思うが、情報開示をすると約束していた本人がそれを実行していないことに対して、何らかの関与があり疚しいことがあったのではないかと不信感もある。特にトランプの主な支持勢力 MAGA から不満が出ている。この暗いスキャンダルから目を逸らし、得意のディールで米国の国益を勝ち取ったとする明るい話題がほしかった。その時期が今だった。ロシアに握られているスキャンダルのネタといい、このエプスタイン文書といい、トランプはスキャンダルには敏感だ。国益を声高に叫ぶが本当のところはどうなのかと疑いたくなる。

今回の関税合意の裏で、日米間に何らかの密約的なものはないことを信じたい。かつての“糸を売って縄を買う”を含めた沖縄返還交渉での密約のようなものが……。安全保障や防衛関連分野においては、一定の機密条項があるため、その森の中に“何か”をこっそり隠すことは可能だ。合意文書なき合意が、今後解釈を巡って齟齬を来すことも十分考えられる。日本側の投資に融資が含まれているかどうか温度差があるといわれている。投資に対する米国側の利益云々も釈然としない。いずれにせよ、関税率は現行よりアップする。交渉を重ねることによって減じられたことに安堵している場合ではないと思う。理不尽ともいえたかつてのプラザ合意は、日本経済を大きく転換させる契機となった。円高不況、その後のバブル経済の発生と崩壊、そして長期の経済低迷へと繋がる日本経済史における重要な出来事として位置付けられた。この教訓をよく覚えておこう。

BB) 産地現状 :

米材市場は需要の停滞と価格の横ばいが顕著である。

丸太市場では、日本向け米松丸太の価格は横ばいで推移している。これは、6月と7月のプレカット向け販売量が伸び悩んだことが要因とみられる。一方で、カナダ産合板向け米松丸太の日本向け輸出価格は、米国市場価格の上昇を受けて値上げとなった。国内挽き米松製材最大手メーカーの丸太仕入れ状況は、新工場が順調に稼働していることもあり、全体では増加傾向にあると見られている。しかし、米国内の住宅着工は盛り上がりには欠け、昨年と比較しても丸太の出材量は少ない状況だ。米国丸太価格には人件費、物流費、燃料費の上昇が影響している。中京地区では、丸太の荷動きは低調であり、ひっ迫感が出ていない。米松丸太の価格は前月から横ばいで推移している。

製材品市場では、米松製材品の不足感は解消されつつあり、KD材は充足していると見られている。米松製材品の市中在庫も、国内挽きでは不足感が解消傾向にある。米松平角と競合するRウッド集成平角は、製材メーカーが7月から値上げを打ち出している。輸入製品の供給タイトは当面続くとみられ、特に小角材が不足気味である。カナダの日本向け米松製材工場で火災が発生したが、現状では市場への影響はないとされている。東北地方の住宅需要は低調であり、米材の荷動きも鈍化している。

需要と供給の背景には、国内の住宅着工が昨年比で少ないことが挙げられ、メーカー側は米松製材品の不足が解消傾向にあると見ている。また、建築基準法改正に伴う駆け込み需要の反動や、確認審査の遅れが需要の落ち込みに影響を与えている。非住宅向け比率を増やした工場は堅調なものの、戸建て向けが主な工場は稼働率が落ちている状況である。北米産地では、原木の出材が少なく、特に日本向け良材の集荷が困難になっているとのことである。

概況

東京 15 号地 在庫推移：

2024 年：

8 月 29 日現在：米加製品 40,709 欧州製品 62,215 ロシアその他 50,604m³ 計 153,528m³
9 月 26 日現在：米加製品 39,931 欧州製品 65,301 ロシアその他 53,235m³ 計 158,467m³
10 月 30 日現在：米加製品 34,794 欧州製品 59,332 ロシアその他 55,595m³ 計 149,721m³
11 月 28 日現在：米加製品 30,788 欧州製品 49,263 ロシアその他 51,830m³ 計 131,881m³
12 月 26 日現在：米加製品 27,258 欧州製品 43,579 ロシアその他 49,392m³ 計 120,229m³

2025 年：

1 月 30 日現在：米加製品 26,988 欧州製品 38,286 ロシアその他 47,135m³ 計 112,409m³
2 月 27 日現在：米加製品 22,445 欧州製品 37,730 ロシアその他 44,510m³ 計 104,685m³
3 月 28 日現在：米加製品 23,188 欧州製品 31,334 ロシアその他 50,043m³ 計 104,565m³
4 月 28 日現在：米加製品 23,054 欧州製品 25,920 ロシアその他 52,784m³ 計 101,758m³
5 月 29 日現在：米加製品 23,611 欧州製品 29,025 ロシアその他 61,875m³ 計 114,511m³
6 月 28 日現在：米加製品 27,212 欧州製品 35,202 ロシアその他 64,317m³ 計 126,731m³

2025 年 7 月 30 日現在：

米加製品 26,585m³ 欧州製品 38,544m³ ロシアその他（含む中国）66,244m³ 計 131,373m³
前月比 4,642m³ の増。米加製品 627m³ 減、欧州製品 3,342m³ 増、ロシアその他 1,927m³ の増。

住宅概況：

2025 年 6 月の新設住宅着工戸数は、前年同月比で減少した。国土交通省が発表した速報値によると、6 月の新設住宅着工戸数は前年同月比 6.7%減の 6 万 6285 戸で、2 カ月連続の減少となった。

詳細な内訳は以下の通り：

- 持ち家：前年同月比 5.6%減
- 貸家：前年同月比 6.2%減
- 分譲住宅：前年同月比 8.6%減

いずれも 2 カ月連続の減少となっている。要因としては、4 月からの新築住宅への省エネ基準適用義務化に伴う 3 月の駆け込み着工の反動や、建築コストの上昇、金利上昇への懸念などが考えられる。

以上

弊社のホームページもご利用ください。

<https://yuasa-lumber.co.jp>